

4 年制大学における保育者養成カリキュラムに関する検討

中西さやか*

傳馬淳一郎

小尾晴美

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)

キーワード：保育者養成カリキュラム、4 年制大学、保育士、幼稚園教諭、保育者の専門性

1. はじめに

1) 問題と目的

現在、保育士や幼稚園教諭等の保育者養成¹⁾においては、2 年制から 4 年制の養成への移行が進んでいる。保育士資格と幼稚園教諭免許の両方を取得可能な養成校のうち、約 46%が 4 年制大学となっており（2018 年 4 月時点）²⁾、このような流れは今後も継続することが予想される。

4 年制大学における保育者養成が求められる背景としては、保育者に高度な専門性が求められるようになってきていることや、保育者という職業に対する信頼や認識を高めることの必要性などが挙げられる（高橋 2016）。このように、4 年制大学における保育者養成の広がりや、より高度な専門性を有する保育者を輩出することに結びつくものと捉えられている。しかし、保育者養成カリキュラム（保育者養成課程）に目を向けると、①保育者には上位資格がないこと、②幼稚園教諭免許の一種と二種の差は一般教養科目の必要単位数にあることなどから、4 年間という修業年限で保育者養成を行なうことは、保育者の力量や専門性向上に結びついているのかという疑問も呈されている（川俣 2012）。

青木（2017）は、保育者養成校の 4 年制化が着実に進行する一方で、養成校の「教育基盤の未成熟」を指摘している。このことは、保育者の専門性向上と結びついた「4 年制大学ならではの保育者養成カリキュラム」を構築するためには（福伊 2016）、単なる修業年限や必要単位数の増加にとどまらない視点からの議論の必要性を提起するものである。

以上を踏まえ、本研究では、4 年制大学における保育者養成カリキュラムの現状と課題を整理し、今後の展望を得ることを目的とした検討を行なう。

2) 研究方法

本研究では、次の 2 つの研究方法によって 4 年制大学における保育者養成カリキュラムの現状と課題を明らかにする。

（1）先行研究の検討

保育者養成カリキュラムに関する先行研究および 4 年制大学における保育者養成に関する先行研究を概観し、4 年制大学における保育者養成カリキュラムの課題を整理する。

（2）ヒアリング調査とカリキュラム分析

4 年制大学における保育者養成カリキュラムの実際に関する予備的検討として、名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科のカリキュラム作成過程や意図などに関するヒアリング調査を行なうとともに、現行のカリ

* 責任著者

氏名 中西さやか snakanishi@nayoro.ac.jp

キュラムの特質を分析する。

2. 4年制大学における保育者養成カリキュラムの課題—先行研究の検討—

日本の保育者養成システムは、保育士と幼稚園教諭の養成という2つのシステムで構成されている。そのため、保育者養成カリキュラムも二元的なものとなっており、次のような問題が指摘されている。すなわち、幼稚園教諭と保育士の資格免許の取得が行政官庁の相違によって二元化されていることによって、学科目編成が極めて煩雑であることが問題となっており（小川 2013）、2つの養成カリキュラムのさまざまな共通性が十分に議論されることなく科目の重複を生んでいる現状がある。

4年制大学における保育者養成カリキュラムの課題を整理するにあたっては、このような養成カリキュラムの二元性を視野に入れる必要がある。以下では、①保育士養成カリキュラム、②幼稚園養成カリキュラム、③両者に共通する課題という3つの視点から、関連する先行研究の知見を整理する。なお、保育者養成カリキュラムを対象とする先行研究においては、特定の授業科目に焦点化した検討が数多く行なわれているが、ここでは保育者養成カリキュラム（保育士養成カリキュラム、幼稚園教諭養成カリキュラム）の全体的な構造やその特質に関する先行研究を中心に検討する。

1) 保育士養成カリキュラム

2018年度現在の保育士資格取得のために必要となる基本的科目とその単位数は以下の通りである³。

表1 保育士資格取得のための基本科目

保育の本質・目的に関する科目	保育原理(講義)	2
	教育原理(講義)	2
	児童家庭福祉(講義)	2
	社会福祉(講義)	2
	相談援助(演習)	1
	社会的養護(講義)	2
	保育者論(講義)	2
保育の対象理解に関する科目	保育の心理学Ⅰ(講義)	2
	保育の心理学Ⅱ(演習)	1
	子どもの保健Ⅰ(講義)	4
	子どもの保健Ⅱ(演習)	1
	子どもの食と栄養(演習)	2
	家庭支援論(講義)	2
	保育課程論(講義)	2
保育の内容・方法に関する科目	保育内容総論(演習)	1
	保育内容演習(演習)	5
	乳児保育(演習)	2
	社会的養護内容(演習)	1
	保育相談支援	1
	保育の表現技術(演習)	4
	保育実習Ⅰ(実習)	4
保育実習	保育実習指導Ⅰ(演習)	2
	保育実践演習(演習)	2
総合演習		

(児童福祉法施行規則 指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法をもとに作成)

これに加え、教養教育科目8単位以上、選択必修科目6単位以上の履修および保育実習Ⅱ(2単位)・保育実習指導Ⅱ(1単位)か保育実習Ⅲ(2単位)・保育実習指導Ⅲ(1単位)を履修し単位を修得することが必要となる。

保育士資格を取得するためには、①厚生労働大臣の指定する指定保育士養成施設(大学、短期大学、専修学校等)において以上に挙げた所定の単位を修得すること、あるいは②各都道府県で行なわれる保育士試験に合格することという2つの方法がある。このことは、保育士の場合、2年制の養成課程であっても、4年制

の養成課程であっても取得できる資格は同一であることを示している。

川俣（2012）は、4年制大学（2校）、短期大学（1校）、専門学校（1校）のカリキュラムの比較をとおし、保育士養成カリキュラムについては大学、短大、専門学校の間で大差ないものとなっていることを明らかにしている。また、丹羽（2011）は、保育実習に着目して、4年制大学における保育士養成課程の課題について考察している。その結果、①シラバス上では4年制大学と短期大学の保育実習指導に明確な違いはなかったこと、②4年制大学であっても資格取得に必要とされる内容は2年制と同一であるため、専門性向上のための付加的な内容については各大学に任されていることなどが明らかにされている。

このように、保育士資格が単一であることを背景として、保育者養成カリキュラム（実習を含む）においては2年制と4年制の間に大きな差異は見られない傾向にあることが示されている。このことは、丹羽（2016）の指摘するように、「4年制大学ならではの目指す保育者像」が明確になっていない現状にもつながるものといえる。

4年制大学のカリキュラムに限ったものではないが、保育者養成カリキュラムについては、次のような視点からの課題も提起されている。立浪（2016）は、保育士資格と幼稚園教諭免許を併有することの功罪として、「大学（短期大学を含む）での幼稚園教諭免許と保育士資格の併有を可能かつ容易にすることを優先してきた結果、保育所以外の児童福祉施設保育士養成カリキュラムの掘り下げが弱い、養成カリキュラムの内容が幼稚園保育所の保育内容に偏りがちである等の指摘もみられる。」（立浪 2016：205）と述べており、保育士資格が0から18歳までを対象とするものでありながらも、乳幼児期の保育に偏ったカリキュラムになる傾向があることが示されている。

2) 幼稚園教諭養成カリキュラム

保育士資格が単一の資格であるのに対して、幼稚園教諭免許状には、一種免許状、二種免許状、専修免許状があり、それぞれ学士、短期大学士、修士の学位を有することが基礎資格とされている。それに加えて、課程認定を受けた大学の教職課程において、所定の単位（下表を参照）を修得することが必要である⁴。

表2 幼稚園教諭免許状取得のための必要単位数

			専修	一種	二種
教科に関する科目			6	6	4
教職に関する科目	教職の意義等に関する科目	教職の意義及び教員の役割	2	2	2
		教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。）			
		進路選択に資する各種の機会の提供等			
	教育の基礎理念に関する科目	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	6	6	4
		幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）			
		教育に関する社会的、制度的又は経営的事項			
	教職課程及び指導法に関する科目	教育課程の意義及び編成の方法	18	18	12
		保育内容の指導法			
		教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）			
	生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	幼児理解の理論及び方法	2	2	2
		教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法			
教育実習		5	5	5	
教職実践演習		2	2	2	
教科又は教職に関する科目			34	10	0

（教育職員免許法施行規則をもとに作成）

先に挙げた川俣（2012）の研究では、幼稚園教諭養成カリキュラムについては、学校によって違いがあることが示されている。免許状の種類によって必要単位数が異なることはもちろんであるが、同じ4年制大学であっても、どのような科目や領域を重視するのかということは各学校で異なっていることが示されている。

3）保育士養成と幼稚園教諭養成に共通する問題

両者に共通する問題としては、4年制大学における保育者資格のオプション化が挙げられる。たとえば、多数の資格取得が可能となる中で、保育士資格はオプションとして位置づけられていることや（北野 2009）、本来の志望に付加的な意味として保育者資格を併有しようとする意識が学生にあることなどが報告されており（奥山・山名 2006）、養成校の4年制化が必ずしも保育の専門性向上に結びついていない現状が浮かび上がっている。

4）小括

以上の検討から、4年制大学における保育者養成カリキュラムの課題として浮かび上がるのは、特に「保育士」養成カリキュラムの在り方である。保育士資格に上位資格がないことは、4年制大学で保育士を養成することの意義が見えにくくなることにつながっており、「4年制大学ならではの」保育者養成カリキュラムの構築は、各養成校の努力に委ねられているといえるだろう。

また、4年制大学において保育者養成を行なっていたとしても、保育士資格や幼稚園教諭免許がオプションとして位置づけられている場合があることも示されていた。この場合、保育士養成にかかわる科目は必要最低限とする養成校もあり（名寄市立大学短期大学部 2013）、4年制化することが専門性の高い保育者を養成することに直結しているわけではないことがうかがえる。

3. 4年制大学における保育者養成カリキュラムの実際—ヒアリング調査とカリキュラム分析から—

次に、4年制大学における保育者養成カリキュラムの実際を明らかにするために、著者らが所属する名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科（以下、「社会保育学科」と表記）のカリキュラムを対象とした検討を行なう。社会保育学科は、名寄市立大学保健福祉学部（栄養学科・看護学科・社会福祉学科）に併設されていた短期大学部児童学科を4年制化して2016年4月に設置されたものである。そのような経緯を持つ社会保育学科のカリキュラムが作成された経緯や意図、およびカリキュラムの特質などを明らかにすることを目的として、以下ではヒアリング調査とカリキュラム分析の結果を提示する。

1）ヒアリング調査

（1）対象者

社会保育学科の設置およびカリキュラムの作成において中心的役割を担った教員A、事務局担当者B（当時）の2名に、個別に60分程度の聞き取りを行なった。調査の実施日は、2017年11月（B）および2018年1月（A）である。

（2）質問項目

質問項目は以下の通りである。

- ①保育者養成カリキュラムの意義や特色、4年制大学だからこそその意義、②短期大学と4年制大学の違い、③カリキュラムにおいて保育の質や専門性の議論はどのように捉えられているか、④カリキュラムにおいて育成しようとする知識や技能、資質能力、保育者像、⑤学生の進路、就職、⑥問題点、課題、⑦公立大学としての意義、地域貢献。

これらの質問項目を提示しながら、当時を振り返る形で聞き取りを行なった。

（3）倫理的配慮

調査対象者に対して、研究の趣旨および研究への参加の自由と個人情報保護の遵守について説明し、調査協力の承諾を得た。

(4) 結果と考察

ここでは、特にカリキュラムの意義・特色および短期大学と4年制大学の違いなどを中心にして、調査結果を提示する。

①短期大学における養成の限界性

社会保育学科の設置は、短期大学部児童学科の4年制化を意味するものであった。その経緯を振り返る中で、4年制化することの必要性について、経営的な観点からの必要性や保育者に対する社会的要請などとともに、従来行ってきた短期大学における養成の限界性が語られた。

「やっぱり短大で保育者養成をしてきた中で、短大生が本当に高校を出て2年で社会に出ていくというのは厳しいものがあるなという風に、年々強く感じていたという気がしていて、(中略)それで、やっぱり4年間、もっと時間がほしいなという中で、もっとこんなこと、あんなこと、時間があったらこんなことできるのになと思ってやってきたと思うんですね。」(A)

「ただ、短大としては、やっぱり限界は来ていたと思います。」(B)

「そこに対する危機感というのは、先生方のほうには多分あったんだろうなと思うんですね。」(B)

Aの語りにおいては、日々学生と接する養成校教員としての実感が示されている。「2年間でどこまでの人材を育てるのか」を考えたとき、4年間という期間の中でより充実した養成を行なうことが目指されていたといえる。

しかし、「学生確保という視点からいうと、決して4年制化がプラスになるかどうかというエビデンスがない」(B)という事務局担当者からの視点も示されており、より長い時間をかけて保育者養成を行なうことが一般的に認知されているのかという問題がうかがえる。

②カリキュラム編成の視点

【短期大学と4年制大学の違い】

カリキュラムの編成にかかわって、短期大学と4年制大学の違いについて、Aは次のように語っている。

「保育士の場合は短大も四大も一緒だけど・・・」

「いや、私、だけれども、短大も四大も専門学校も同一のあれでやっているというのはすごく問題だと思っているんですね。」

「保育士の場合はそうではなくて、基礎資格というのがないんですよね、そういう意味では。だから、学問とは結びついていない、本当は結びつかないといけない、ものすごく結びつかなくちゃいけない資格だと私は思うんだけど、そこがすごく問題があるなというふうに感じていて、短大から四大にするにあたっては、やっぱりそのところって補う形でやっていかなきゃいけないんじゃないかなという思いは、私は個人的にはそう思っていました。」

先行研究の検討からも明らかになったように、保育士資格や必要な科目などは4年制大学であっても短期大学であっても同一であり、ここでもそのことに対する問題意識が示されていた。4年制大学においては、「学問」との結びつきを意識して、保育士養成カリキュラムを補う形で学科カリキュラムの編成する必要があるという考えが示されている。また、Aは短期大学と4年制大学の違いについて、「卒論に代表されるような学問をすること」という表現を用いている。その意味するところは、実践的にすぐに使える技術の習得のみに焦点化するのではなく、「自分で身につけていける力」「もっと本質的なところに目を向けて問題を解決できる力」を養っていくことであるとも語られていた。

【カリキュラム編成上の難しさ】

一方、Bからはカリキュラム編成上の難しさについて、次のような発言があった。

「もう少し学生の負担を考えて、こことここを組み合わせたり圧縮できないだろうかという話はした記憶があります。時間割が組めないというのも、私の立場から、見た瞬間思いました。」(B)

教員側からは、4年間のなかでこれまでにはできなかったことを科目として盛り込みたいという希望が示されたとしても、二元的な保育者養成カリキュラムの過密さを考えると、単純に科目を増設することには限界があるという難しさが示されている。

【「社会保育」という視点とカリキュラムのつながり】

社会保育学科は、学科名にもなっている「社会保育」をキーワードとした養成教育をその特色としている。この「社会保育」という理念・視点とカリキュラムのつながりについては、以下のように語られている。

「保育者は子どもとかかわるときに、その場面だけじゃなくて、色んな子どもの背後にある生活とか親の子どもも含めて、色んなことがわからなきゃ、想像できなきゃいけないということがあり（中略）子どもが生きていく、育っていくという実際の場面にいるのは保育者なわけだから、そういう人たちがただ子どもが好きというだけじゃなくて、育っていくというのは子どもの権利なんだとか、そういう意識を持っていることがすごく大事」(A)

ここでは、目の前の子どもにどのようにかわるかということを考えるときには、子どもだけを見るのではなく、子どもと保護者の生活などをはじめとする社会的な視点を持つことの重要性が示されている。

2) 社会保育学科のカリキュラム

次に、以上のようなヒアリング調査の結果を踏まえながら、社会保育学科のカリキュラムの特色について検討する。

(1) 取得可能な資格と卒業要件

社会保育学科では、保育士資格、幼稚園教諭一種免許状、特別支援学校教諭一種免許状の取得が可能である。卒業要件は、教養教育科目 22 単位以上、専門教育科目 106 単位以上の計 128 単位以上の修得である。

表3 社会保育学科の卒業要件

	必修	選択	卒業の要件
教養教育科目	12 単位	10 単位以上	必修を含め 22 単位以上
専門教育科目	85 単位	21 単位以上	必修を含め 106 単位以上
計	97 単位	31 単位以上	128 単位以上

(2018 年履修ガイドをもとに作成)

(2) カリキュラムの特色

次頁の表に太字で示したように、4 年制化に伴って増加した科目が数多くある。それらの科目の特徴は、次のように分類することができる。

①子どもの保健医療福祉に関する科目

これは、科目区分「子どもの健康」における科目群であり、社会保育学科が保健福祉学部位置づいていることから、保健医療福祉に関する科目が置かれているといえる。

表4 平成30年度 社会保育学科専門教育カリキュラム

	科目区分	1年次	2年次	3年次	4年次
専門分野	子どもの健康	○公衆衛生学	○感染微生物学	○医療概論	食生活論
	社会保育の理念	社会福祉概論	人権と法	○子どもの権利 ○家族社会学 ○社会保育論	
	社会保育			○保健医療福祉連携論 社会保育論演習	○保育システム論 保育経営論
専門基礎分野	保育の基礎理論	○保育原理 ○教育原理 ○教職概論(幼稚園) ○子ども家庭福祉Ⅰ ○社会的養護	○相談援助 子ども家庭福祉Ⅱ	○保育者論 ○教育法概論 幼児教育史	生涯学習論
	保育の対象理解	○発達心理学 ○子ども教育心理学	○子どもの保健Ⅰ ○家庭支援論	○子どもの食と栄養 ○子どもの保健Ⅱ	
	保育の内容と方法	○保育内容総論 ○保育内容・人間関係Ⅰ ○保育内容・健康Ⅰ ○保育内容・表現Ⅰ	○保育指導論 ○保育内容・言葉 ○保育内容・環境Ⅰ ○乳児保育Ⅰ ○社会的養護内容 ○子ども理解と教育相談 ○自然保育実践演習 児童文化演習	○保育相談支援 保育内容・人間関係Ⅱ 保育内容・環境Ⅱ 保育内容・健康Ⅱ 保育内容・表現Ⅱ(音楽) 保育内容・表現Ⅱ(造形) 保育内容・表現Ⅱ(言語)	○乳児保育Ⅱ ○病児・病後児保育 就学児保育A(思春期の支援) 就学児保育B(学童保育)
	保育の教材研究	○音楽Ⅰ ○図画工作Ⅰ ○体育 国語 生活 児童文化	音楽Ⅱ(ピアノ) 図画工作Ⅱ	音楽Ⅲ(ギター)	
	障がい児の保育・教育	○障がい児支援の基礎理論	○障がい児保育 ○知的障害者教育方法論 ○重複障害・発達障害の評価 知的障害者の心理・生理・病理 重複障害・発達障害の教育	肢体不自由者の心理・生理・病理 病弱者の心理・生理・病理 知的障害者教育課程論 肢体不自由者教育課程論 肢体不自由者の教育方法論 病弱者教育論 視覚障害者教育総論 聴覚障害者教育総論	障がい児福祉 障がい児教育実習事前事後指導 障がい児教育実習
	保育の実践	○地域との協働Ⅰ	保育指導論演習 家庭支援実践演習 ○地域との協働Ⅱ	地域との協働Ⅲ 教育実習 教育実習指導 保育実習Ⅰ 保育実習指導Ⅰ	保育実習Ⅱ 保育実習指導Ⅱ 保育実習Ⅲ 保育実習指導Ⅲ
	専門研究				○卒業研究 ○教職・保育実践演習

(○は必修科目、太字は4年制化に伴い増設された科目)

②保育の内容と方法に関する科目

これは、「保育内容の指導法に関する科目」(幼稚園)、「保育の内容・方法に関する科目」(保育士)にあたるものであり、特に5領域にかかわる保育内容演習に「Ⅱ」が設けられている。

③保育士養成にかかわる科目

「社会保育論」「社会保育演習」「就学児保育A(思春期の支援)」「就学児保育B(学童保育)」「病児・病後児保育」「家庭支援実践演習」は、保育士の養成にかかわる科目である(幼稚園教諭養成科目ではない)。「社会保育」にかかわる科目とともに、4年制大学における保育者養成を意識した科目が設けられている。

④特別支援学校教諭免許にかかわる科目

4年制化に伴って増加した科目のうち、最も大きな比重を占めているのは、科目区分「障がい児の保育・教育」である。これらの科目は、特別支援学校教諭一種免許状の取得に必要な科目である。

以上のことから、保健医療福祉、保育の内容と方法、障がい児の保育・教育にかかわる科目など、いくつかの視点から4年制化にともなって新たな科目が設けられたことが示された。中でも、保育士養成にかかわる科目の増設は、4年制大学における保育者養成カリキュラムの在り方や目指すべき保育者像の明確化につながりうるものではないだろうか。

4. おわりに

本稿では、4 年制大学における保育者養成カリキュラムの在り方を展望するために、先行研究を整理するとともにカリキュラムの実際を示した。結果としてあくまで予備的な検討となったが「4 年制大学ならではの保育者養成カリキュラム」の構築にあたっては、①上位資格のない保育士養成カリキュラムの在り方、②4 年制大学でオプション化する保育者資格の問題などをどのように考えるのかが問われるといえる。

修業年限を伸ばし、より長い時間をかけて多くのことを学ぶことが必ずしも専門性の高い保育者の養成につながるわけではない、という現状が示されるなかで、すべてを各養成校の工夫や努力に委ねることには限界性があるだろう。保育士に関しては、研修制度やキャリアアップなどが議論されるようになっているが、資格そのものの高度化や養成のあり方などより広い視野からの議論が望まれる。

今回は、ヒアリング調査やカリキュラム分析の検討が一校にとどまったが、今後は調査対象を広げ、さらに検討を進めていく必要がある。

注

1. 本稿では、保育士と幼稚園教諭をあわせて「保育者」と表記する。また、保育士資格と幼稚園教諭の養成を行なう学校を「保育者養成校」と表記する。
2. 幼稚園教諭免許の取得可能な学校一覧（1 種免許状・2 種免許状）および指定保育士養成施設一覧から、保育士資格と幼稚園教諭免許の両方取得可能な養成校数を集計した。内訳は、4 年制大学 220 校、短期大学 214 校、専修学校 45 校である。
3. 保育士養成課程は、保育所保育指針の改定を受けて 2019 年度より新課程となる。そこでは、①乳児保育の充実、②幼児教育を行う施設としての保育の実践、③「養護」の視点を踏まえた実践力の向上、④子どもの育ちや家庭への支援の充実、⑤社会的養護や障害児保育の充実、⑥保育者としての資質・専門性の向上を重点課題として、新たな科目が配置されている（保育士養成課程等検討委員会「保育士養成課程等の見直しについて—より実践力のある保育士の養成に向けて—（検討の整理）2017 年 12 月 4 日」）。
4. 幼稚園教諭養成課程も、幼稚園教育要領の改訂を受けて 2019 年度より、「教職課程コアカリキュラム」を中核とした新課程となる（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会「教職課程コアカリキュラム」平成 29 年 11 月 17 日）。

引用文献

- 青木紀（2017）『ケア専門職養成教育の研究』明石書店。
- 福伊智（2016）「研究ノート：保育者養成カリキュラムの課題と展望—専門家としての保育者を育てる—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』2：90-97。
- 川俣美砂子（2012）「保育者養成課程におけるカリキュラムの比較分析—大学・短期大学・専門学校に焦点を当てて—」『福岡女子短大紀要』77：15-26。
- 北野幸子（2009）「ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成の実態と課題」『社会福祉学』50(1)：123-133。
- 名古屋市立大学短期大学部児童学科（2013）『平成 24 年度特別枠支援研究報告書 児童学科の 4 大化に向けた調査研究—多様な保育ニーズに応えるための保育者のスキルアップと受験生の動向』
- 丹羽さかの（2011）「保育士養成課程の課題に関する一考察—4 年制大学における保育士養成課程の課題について—」『白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報』16：26-38。
- 小川博久（2013）『保育者養成論』萌文書林。
- 奥山順子・山名裕子（2006）「求められる保育者の専門性と大学における保育者養成—保育者志望学生の意識と養成教育の役割—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』28：119-132。

鈴木佐喜子（2015）「変化する保育現場と保育者養成、保育者の成長の課題—日本とニュージーランドの比較を通じて—」『臨床教育学研究』3：24-42.

高橋貴志（2016）「保育士養成—保育者養成の現状とこれから 1」日本保育学会編『保育学講座④ 保育者を生きる—専門性と養成—』東京大学出版会、209-223.

付記

本研究は、平成 29 年度名古屋市立大学特別枠支援の助成を受けた研究成果の一部である。

謝辞

貴重な時間を割いて調査にご協力いただいた A 氏と B 氏に、心より感謝申し上げます。

